

話題(そのIV)

1976 International Conference on the Interactions of Neutrons with Nuclei に出席して

田中 茂也 (原研)

この会議は1976年7月9～9日、Lowell, Massachusettsで開催された。ICINN Conferenceと略称される。参加人員は390人と発表された。会議はメイン・セッション、パラレル・セッション（ポスター・セッションを含む）などで構成された。メイン・セッションは招待講演、特別講演およびフォーラムから成っている。次にメイン・セッションのプログラムを挙げる。

July 6, a.m.

July 7, a.m.

- ME 1 Fluctuation Enhancements of Compound Cross Sections for Elastic, Directly Coupled, and Weakly Absorbed Channels : P. A. Moldauer

ME 2 Spin Determination of Fission Resonances : G. A. Keyworth

ME 3 Neutron-Induced Reactions on Very Light and Light Target Nuclei : I. Slaus

MF 1 Neutron-Induced Reactions I : (n, α) Reactions on Medium and Heavy Nuclei : N. Cindro

MF 2 Neutron-Induced Cascade Reactions : J. Frehaut

MF 3 Neutron Polarization : F. W. K. Firk

p. m. Conference Excursion to Boston

July 8, a. m.

MG 1 Theoretical Neutron Physics I : Elucidation of Nuclear Structure : V. G. Soloviev

MG 2 Theoretical Neutron Physics II : Microscopic Calculations of the Optical-Model Potential : C. Mahaux

MH 1 Theoretical Neutron Physics III : Special Fluctuations and the Statistical Shell Model : P. A. Mello

MH 2 Theoretical Neutron Physics IV : Nuclear Reactions :

A. M. Lane

p. m.

MI 1 Use of Neutron Scattering for the Analysis of Biological Structures : B. P. Schoenborn

MI 2 Solid-State Aspects of Neutron Physics Research : W. Glaser

MJ 1 Neutron Astrophysics : R. A. Smith

MJ 2 Neutrons and Energy : J. L. Fowler

July 9, a. m.

MK 1 Neutrons and Fission : A. Michaudon

MK 2 Neutron Induced Fission of ^{233}U , ^{235}U , and ^{239}Pu : P. Bary Malik

MK 3 Doubly Radiative Neutron Capture in H_2 and D_2 : E. D. Earle

ML 1 Neutrons and Fusion : C. W. Maynard

ML 2 Neutron Physics at LAMPF : L. C. Northcliffe

p. m.

MM 1 Research Trends in Neutron Physics : J. E. Lynn

MM 2 Conference Forum : H. H. Barschall (Moderator),
(Panel) C. Coceva, J. Csikai, A. T. G. Ferguson,
P. T. Iyenger, V. G. Soloviev, S. Tanaka, Z. L. Wileman

MN 1 Conference Summary and Overview : E. P. Wigner

MN 2 Closing Address : I. M. Frank

MN 3 Concluding Remarks : E. Sheldon

パラレル・セッションでは投稿論文の10分講演の他に、メイン・セッションに含めきれなかつたと思われる特別講演などが行なわれた。私の数えたところでは、投稿論文の数は189編である。

た。次にパラレル・セッションのプログラムを挙げる。

July 6, a. m.

P A 1 Neutron Installations and Facilities : S. W. Cierjacks

P A 2 Accelerator-Produced Neutrons of High Flux Rate :

L. Cranberg

p. m.

P B 1 Parallel Sessions of Contributed Papers :

A 1 - 8 : Neutron Properties and Forces

G 1 - 8 : Polarization

J 1 - 8 : Fission and Fusion

F 1 - 8 : Neutron-induced Reactions

K 1 - 8 : Theoretical Neutron Physics

P B 2 Parallel Session of Contributed Papers :

H 1 - 11 : Neutron Instrumentation

D 1 - 7 : Photoneutrons and Rad. Capture

J 9 - 15 : Fission and Fusion

B 1 - 7 : Resonance Neutrons

K 9 - 15 : Theoretical Neutron Physics

P B 2 Poster Sessions (表題省略)

July 7, a. m.

P C 1 Fast Neutron Detectors and Instrumentation : B. Zeitnitz

P D 1 Technological and Industrial Applications of Neutron :

C. Weitkamp

P D 2 Determination of Scattering Lengths and Magnetic Spin

Rotations by Neutron Interferometry : H. Rauch

P D 3 Structure Study of $^7, ^8$ Li and $^{11}, ^{12}$ B from Elastic Scattering of Neutrons : R. O. Lane

p. m. Conference Excursion to Boston

July 8, a. m.

P E 1 Production of Polarized Fast-Neutron Beams- An Evaluation of Several Methods : R. L. Wolter

P E 2 An Optical Model Potential Based on the Folded Yukawa Model : A. Prince

P E 3 Neutron Standards and their Application : H. Liskien

P F 4 The Importance of Neutron Data in Fission Reactor Appli-

cations : E. M. Bohm

P F 2 Neutron Sources for Medical Applications : K. E. Sheer

P F 3 Status of Neutron Activations Cross Sections for Reactor
Dosimetry : M. F. Vlasov

p. m.

P G 1 Parallel Session of Contributed Papers :

E1-6: Neutron Scattering

D8-13: Photoneutrons and Rad. Capture

J16-18: Fission and Fusion

I1-3 : Standards and Data

B8-13: Resonance Neutrons

K16-21: Theoretical Neutron Physics

P G 2 Parallel Session of Contributed Papers :

E7-12: Neutron Scattering

D14-19: Photoneutrons and Rad. Capture

I4-9 : Standards and Data

B14-19: Resonance Neutrons

K22-28: Theoretical Neutron Physics

P G 2 Poster Sessions (表題省略)

July 9, a.m.

P H 1 Parallel Sessions of Contributed Papers :

E13-17: Neutron Scattering

D20-24: Photoneutrons and Rad. Capture

I10-14: Standards and Data

C1-5 : Neutron Facilities

K28-32: Theoretical Neutron Physics

P H 2 Parallel Sessions of Contributed Papers :

E18-23: Neutron Scattering

L1-7: Miscellaneous Topics

F9-14: Neutron-Induced Reactions

K33-38: Theoretical Neutron Physics

P H 2 Poster Sessions (表題省略)

上記のプログラムの通り、会議の内容は中性子物理の非常に広い範囲にわたっている。私は会議の後半ではパラレル・セッションおよびポスター・セッションで、2つの投稿論文の紹介と、同じ専門分野の聴講に忙殺されてしまって、メイン・セッションの後半の大部分を聞くことができなか

った。次に特に私の興味を以いた点、私の専門と関係の深い分野について、その概略を紹介する。

M A 「中性子物理の最近の進歩」

まず、荷電を持たない中性子に対する中性子のコントロールの分野での進歩に関する話があった。フィルターの使用は k V 領域に、ライナックの実験では M e V 領域にそのエネルギー領域が拡大された。偏極の実験の進歩、非常に多くの共鳴レベルに対するスピンの決定にも話が及んだ。

次に理論に関する進歩、測定に関する進歩の話がなされた。

M C 「高速中性子による放射吸収」

M e V 領域における放射吸収の研究分野では、今後解決すべき問題として、軽い核による放射吸収に理論と実験との不一致があること、および 5 M e V 以下でもいくつかの未解決の問題があることが指摘された。

「極低温中性子」

Dubna における極低温中性子の現状の報告が行なわれた。 $5 \times 10^{13} n/cm^3 sec$ の熱中性子束から、強度約 $10^3 n/sec$ 、密度 $10^2 n/liter$ までの極低温中性子ビームを得ている。最大の蓄積時間は約 400 sec である。この時間は理論的予測によるものに比べて、遙かに短い。しかし、400 sec の蓄積時間は電気的二重極モーメントなどの測定に充分な時間である。

M D 「高速中性子の散乱」

この分野では Ohio 大学、Kentucky 大学、Bruyères le Châtel などにおける同一元素に対する数種の分離同位体を用いた研究が目立った。

例えは Bruyères le Châtel において Shamu らは Nd および Sm の偶-偶核による散乱の実験を行ない、光学ボテンシャルのアイソ・スピン項、スピン-軌道項の検討を行なった。また、これは分離同位体を用いたものではないが、Ohio 大学の Rapaport らは 26 M e V で Si, S および Ca による (n, n) および (p, p) の実験を行い、光学ボテンシャルのクーロン補正項の検討を行った。(n, n) と (p, p) の実験を同一実験者が行なって、この種の検討を行うのは初めての試みであろうと思う。

McEllistrem によるサーベイ・トークの中では私の結合チャネル理論を用いた全断面積および散乱に対する解析も紹介され、結合の影響が 3 M e V 以下のむしろ低エネルギー領域で大きく現われる事実が強調された。

ORNL の Kinney らは ORELA の 40 m のテスーションのところで、中性子検出器を 8 個所の角度に設置して、飛行時間と波高との二次限的測定を行った。飛行時間は入射中性子の分析に、波高は散乱中性子の分析に用いられた。エネルギー領域は 0.5 ~ 3 M e V であった。この種の二次限的測定は初めての試みで、今後の成果が期待される。

M E 「核分裂共鳴におけるスピン決定」

この話は、ANL における“核分裂断面積”に関する会議の(4)スペシャル・トピックスの(1)と同種のものである。

M F 「中重核および重い核における中性子反応」

Cindro によって (n, p), (n, α) の話が, Frehaut によって ($n, 2n$), ($n, 3n$) の話がなされた。いずれも, precompound 理論を考慮した解析の話である。(n, α) 反応に対して、この理論を適用することは、 α 放出確率の算定の点で困難があったが、最近 le Chatel でこの種の計算が開始された。

MG, MH 「理論中性子物理」

講演者と題名は次の通りである。

V. G. Soloviev : 「核構造の解明」

C. Mahaut : 「光学模型ボテンシャルの微視的計算」

P. A. Mello : 「スペクトルのゆらぎと統計的殻模型」

A. M. Lane : 「中性子反応」これは特に二山ボテンシャル障壁を持った核に対する (n, γ) の話に重点がおかれた。

MK 「核分裂」

Michandon による「核分裂」の話を聞くことができなかったが、話は ^{232}Th の三山ボテンシャル障壁や ^{240}Pu のダイナミカルな核分裂障壁にも及んだようである。

パラレル・セッションで行なわれた「中性子測定技術」の内、一つだけ私の興味を引いたものを取りあげる。

PB2/H4 「高検出効率、時間打消しシンチレーション検出器」

高い検出効率のために $18\text{cm}\phi \times 30\text{cm}$ という大きな液体シンチレーターを用い、これを飛行時間法の測定に使おうというわけである。このシンチレーターの両側に光電管をつけ、“二重傾斜の時間-波高変換器”を用いて時間打消しを行う。これで 700 ps の時間分解能を得ている。

この技術は数 10MeV といった高いエネルギーの中性子検出技術に広く用いられるようになるとと思う。

MN 「会議の要約と予測」

Wigner によって行なわれたこの講演の中で、「新しい考え方および現象」という主題の下に次の 3 点が挙げられた。

- 1) 中性子フィルター
- 2) 中性子容器（これは超低温中性子の話である）
- 3) $^{59}\text{Ni}(n, \alpha)$ 共鳴

これはよい分解能で ^{59}Ni による (n, p), (n, α) の断面積測定において、 Γ_α のより Γ_p が共鳴準位が変ると、非常に大きく変化するという現象である。

前VCもおことわりした通り、上記の紹介は大分偏っている。今回、日本からは私の他に、東大 寺沢 徳雄氏、東工大 北沢 日出夫氏および京大から Rensselaer 工科大学に留学中の小林 捷平氏が出席されたので、三氏から、より詳細な紹介がなされることを期待する。

文献としては Invited Papers および Special Contributed Papers の Abstracts

(41編) およびContributed Papers の Abstracts (189編) が配布されたので帰参した。御興味をお持ちの方は田中までお問合せ下さい。Conference Proceedingsは the Technical Information Center of the U. S. Energy Research and Development Administration, P. O. Box 62, Oak Ridge から出版されることになっている。

以 上